
グループワークの視点

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 011

千葉 晃央

2012年1月24日 札幌市白石区のマンションで知的障害のある妹（40）と姉（42）とみられる遺体が見つかった問題で、この姉は約1年半前から3回にわたり区役所に生活相談に訪れ、生活保護申請の意向をみせていたことが、市役所への取材で分かった。姉は自身の仕事や妹の世話をしてくれる施設も探していたようで、その最中に急死し、連鎖的に悲劇が起きたとみられる。（毎日新聞より）

札幌市ではこの後、福祉制度を利用していない在宅の知的障害者の世帯に対して訪問を重点的に行いました。その中には施設などを利用せずに、ずっと家族と一緒に暮らしている方もいたことが取材で紹介をされていました。家族が自営業で、そこで働いていたり、家事手伝いをしている方もいたり、殆ど家から出ないで過ごしている方もありました。

そこでは、親が親自身亡き後の障害を持った自分の子を心配している姿が複数ありました。「私が元気でいるうちは私が…」と

いう声は知的障害者の労働現場にいても、ご家族からよく聞こえてきます。

一方で本人がどうしたいのか？ということより重視する価値観に基づいて、家族の意見よりも本人の意見を大切に！という考え方も、もちろんあります。本人が決める時、選択肢をあげてきてみてご本人が選ぶ。この時、注意しなくてはいけないのは、その選択肢を当事者がどれだけ理解して決めたのかです。そこでは、いかに理解してもらえよう努力をしたかが問われます。以前、この連載で施設行事の旅行の行先をみんなで投票して決めた過程を書きました。あのやり方のように、絵や写真で伝える努力、また、利用者の方と事前に実際に行ってみるといいうのも知的障害の特性を考えると重要になります。

■ 集団という小社会へ

生物として、加齢とともに新しいこと、新しい環境に適応することにエネルギーを使うようになるのは容易に想像がつかます。多くの親が子らよりも先に亡くなるというのもまた現実です。家で行ってきたきめ細やかな対応を、家ではない場所で、公共の福祉サービスを中心的に利用して実現することはなかなか難しいです。

人は誰もが、家族から離れ、次の生活の場で新たな社会、新しい集団に参加をしていきます。これは人が成長する上で歩む道です。その道程では、家族にしかわからない、「家族にしか理解してもらえない表現ではなく、より多くの人に伝わる表現方法を身に付けていく。

そういった場としても知的障害者の労働現場は機能しています。家族とは違う「集団」という小さな社会での経験の積み重ねを保障する場でもあるのです。

■わたしにもできる！

集団の場面では、お互いがお互いに影響を与えます。あの人がしている仕事を自分もしてみたい！あの人みたいに一般就労をしたい！まずはあの人といっしょに、あの仕事をしたい！…。仕事をする動機づけになります。反対に、よくないとされることも影響を与え合います。

作業中のマスクを着けていない人がいるとそれを真似する人が現れて、それがまた「かっこいい」という価値観を生んでいたりすると、なかなか手ごわいのです。わかっているけど、そういう砕けた、ラフな感じが「かっこいい！」というのは多くの人が少年期、青年期に経験してきた感覚です。実年齢と、発達年齢の両方の発達課題が併存する可能性もある知的障害の特性を考えると「仕事だから」「お給料もらっているから」「危険だから」と職員が伝えるだけではうまくいかないことも多いです。そういう時には集団という視点から働きかけることも重要になってきます。職員が言わずに、友人が言う。個別にではなく、全体に伝える…。試行錯誤です。



集団、グループのメリットとして、モデリングなど学習理論に基づいて、影響をお互いがしあうことは明らかにされてきました。特に少年期、青年期には、家族よりも友人、同僚など、同年輩、もしくは少し上世代から影響を受けることが多いとされています。その点からも福祉現場での集団のという枠組みでみる視点は過小評価することはできません。

助けてもらう経験、葛藤に直面する経験、同時代を生きる輩から影響を受ける経験、役割を期待される経験、ライバルができる経験、苦手な人や場面に出会う経験…いろんな意味でよい面も悪い面もあるのが集団での経験です。今は悪い経験のように見えても長期的な視点でみるとそうでないことも起こります。そんな経験ができるのも集団という場です。そこで何を抽出し、どういう演出をし、どんな意義があるとするのか？そして、そのことでどういう働きかけをするのか？その結果何を利用者に提供できるのか？そういうことにエネルギーを注ぐことが援助職に集団場面では求められています。

■捨てた集団援助技術

「福祉現場の多くが集団という環境なので、もっとグループワークの視点がないといけないと思う」という指摘を聞くことができました。心の底から同感しました。施設、グループホーム、近隣住民、地域生活を支える支援者ネットワーク…すべてがグ

ループです。グループで目的を共有し、福祉的なことに価値を置いて進めていくとき、そのポイントや視点、分析等が「グループワーク」として社会福祉の実践活動として整理されてきました。

少し前まで、福祉専門職の教育において、グループワーク（集団援助技術）という分野は、ケースワークとコミュニティワークと並んでソーシャルワークの一分野として長年成立してきました。セツルメント運動、



YMCA、ボーイスカウトなどを起源として、教育、医療、心理、福祉など広い裾野を持ちながら、その中でも共通なこと、集団をみるポイント、集団の成長にそった援助のプロセス等の経験知がたくさん積み上げられてきました。社会福祉領域の国家資格である社会福祉士の養成課程では、以前は教科書1冊ぐらいグループワークを取り上げていました。しかし、現在、教科書2冊のうちたった1章分しかグループワークに関しては扱われていません。

理由の推測はできます。集団で起こっていることを研究でどうとらえて、どう伝えるのかという難しさ、対象者の合意が前提という研究上の倫理が年々厳格化されたこ

とによる研究での大きな労力の必要性、グループワークの実践家はアクティブな人が多く机より、現場にいたために研究者層が薄かった…などです。

1冊から1章に削減されたことによるコンテンツの減少はすさまじいです。その背景には、ジェネラリストアプローチ（課題に対し、直接その対象に働きかけていくだけでなく、同時に他の枠組み、つまり、地域や制度や集団にも働きかけていくソーシャルワークのアプローチ）をいう考えがソーシャルワークの最新の流れとされたことも大きいです。このアプローチにグループワークは統合されたということになっています。

「地域でその人のニーズに適した複数の支援機関による支援を組み合わせ、それらの支援機関のネットワークとともに暮らす」これが様々な歴史の変遷を経た今の福祉おけるひとつの目標とされています。地域というグループで暮らし、支援者のネットワークというグループに支えられる…ど

こをとっても現場ではグループ場面ばかりです。

■ グループを資源に

現在、福祉現場では、個別支援計画書は立案されますが、グループに対する計画、アセスメント、インターベンション…の視点は制度上直接的には扱われていません。個別支援計画書を立てて、結果を求める。これだけを複数利用者がいる場面で個別にバラバラにしているのは集団場面が活かされません。集団の場ですので集団のストレングス（強み）が発揮できるよう援助者の視点、そこでの工夫、試行錯誤もしたいところです。

集団でいる場面をグループワークの視点で見ることが、現在ある状況からけられる「のびしろ」ではないかと思っています。

（写真：橋本総子）

